明治前期の地域医師群像

――明治八年　第一二大区の「医生履歴書上」から――

新井勝紘

はじめに

この資料は、表紙に「医生履歴書上、明治八年十月、第拾弐大区」とあるように、明治七年の大区小区制施行以後、第一二大区に属した地域に開業している医者の経歴一覧である。一小区から一三小区まで順に記されており、明治前期の医療スタッフとその体制が把握できる貴重な資料といえる。一二大区というのは、現在の地域では青梅街道沿いの瑞穂町・武蔵村山市、五日市街道沿いの立川市（砂川）、福生市、秋川市、五日市町、それに昭島市と羽村市の一部が入っているが、この資料では総計二六名の医者がリストアップされている。五日市村に三人、伊奈村（現五日市町）・砂川村（現立川市）・中藤村（現武蔵村山市）に各二人という配置をみると、人口の問題もさることながら、これらの地域は経済や文化の拠点ということができる。

開業年については、二名が不明ではあるが、天保年間が四名、弘化年間が四名、嘉永年間が六名、安政年間が二名、慶応年間が一名、明治以降が七名で、天保から安政までの幕末期に集中していることがわかる。年齢的には、二四歳の最年少医師から、七〇歳の老医師までおり、幅は広い。もっとも多いのが五〇代の七人で、以下四〇代が六人、三〇代が四人、六〇代が三人と続く。四〇から五〇代にかけてのベテラン医師が多いことが指摘できるだろう。

熊川村の石川一作

ところで、この中で福生地域の医師は二人である。一人

は最年少の石川一作で、ここでは「六小区多磨村」となっているが、「羽村・川崎・五の神・福生・熊川」の範囲の六小区が、明治八年に「多摩村」と改称されたところから、この名称が使われている。実際の開業地は熊川村である。石川の次に記されている横田甫助（福生村）、横田幾三郎（川崎村）も同様である。

まず石川であるが、もとは熊川村の農民、野島半平の厄介で、野島一作といっていた。明治六年の資料（「医師履歴書」、石川元八家文書、『福生市史資料編・近代』に所収）に野島とあるので、その頃までは野島姓だったのだろう。明治八年には石川となっている。石川家との関係ができて改姓したのであろう。

ところで、石川の学歴であるが、文久三年（一八六三）二月から明治三年（一八七〇）八月まで、都合七年七ヶ月もの長期にわたって、相模国高座郡相原村（現神奈川県相模原市）の吉川元順に就いて、「漢医外科学、痼疾医学」を学んだとある。修学が終ると同時に熊川村で開業した。吉川元順については未確認であるが、その次男の吉川元達は、「三多摩郡中の刀圭家にして実験家を以て称せらるるもの君なり」（深井斧三郎『三多摩郡人物評』（第一篇）、明治二六年刊、『多摩文化』第十八号所収）といわれた名医で、明治一二年に八王子の八日町で開業している。元達の経歴をみると、十五歳で江戸に出、幕府田安家奥医師の川上養順に従ったのをはじめ、蓮池新十郎に英学、渡辺良策に内眼科を学んでいる。間もなく江戸で開業し、田安家出入の医師ともなる。また文久三年（一八六三）正月の将軍家茂の上洛時には、八王子千人隊の医師となって上京し、翌一八六四年には武田耕雲斎ら水戸浪士の天狗党が甲府城に乱入しようとした際に、千人隊警備の医員として従軍したりしている。

息子の元達がこうした活動をしている最中に、石川は、その父元順のもとで長く医学の実践を学んでいたことになる。いまのところ、この石川の人物像や医療技術、あるいは思想等についての情報を得ていないが、幕末から明治へという激動の時代に生きた医者として、注目しておく必要があろう。

福生村の横田甫助

もう一人の医師は福生村の横田甫助である。石川よりも二まわりも上で、明治八年の時点で四八歳とあるので、一八二八年（文政一一）の生れと推測できる。武田の遺臣との家譜もある横田家は、八王子千人同心の一員であった。四代目の幸七（寛政一一年没）の安永年間頃（一七七〇年代）から医業をはじめ、代々医師を継いできた名望家としても知られる（『横田穂之助日記――幕末における千人隊』の解題参照（北原進）、福生市教育委員会、一九七五年三

月)。北原氏の解説によれば、甫助(穂之助ともいう)は、横田家七代目にあたる。千人同心は五代目の左内が、文化一一年(一八一四)に千人頭の石塚(坂)政衛門から番代勤務を命ぜられてからで、六代目の左市(佐一)は「同心世話役」についている。七代目にあたる甫助も同様に世話役に就き、家茂上洛時には、前述の吉川元達と同じく、八王子千人同心の一員として文久三年二月から六月までの四ケ月間滞京勤務している。この間に記した「御上洛御供日記」と「御上洛御供中日記」は、在京中の動向や見聞、さらに上洛に関する御用書などが書き留められており、貴重な記録となっている(前同、『横田穂之助日記』として解説公刊されている)。

甫助が神奈川県令・中島信行に提出した履歴によれば、天保一四年(一八四三)から弘化四年(一八四七)までの四年一一ケ月、年齢的には一五歳から一九歳まで、江戸に出て、半井(なからい)出雲に就いて「漢方医、痼疾医学」を研究したとある。この間の江戸体験は、若いが故に強く印象に残ったことは推測に難くない。修学の終了と同時に故郷で医業を継いだことになる。その後、同心役として再び上京するまでの二七年間、福生村での医療活動を続けたのであろう。

三多摩の医学史と漢医・古方医

医者経歴一覧に示したように、二六名のうち西洋医学を学んだ者は、中藤村の指田鴻斎が伊東南洋に、同村の内野容斎が益城良斎に、岸村の池谷玄雄が葛野良沖に、砂川村の清水清兵衛が山本玄通に、伊奈村の坂本周英が葛野良沖にといったところで、僅かに五人しかいない。あとはほとんど、漢医、古方医(術)であった。

多摩の医学というと、松本斗機蔵、秋山義方、猿渡研斎、伊東貫斎、青木芳斎など蘭方医が注目されるが、漢医や古方派医学者にも優れた人材がおり、幕末から明治初期にかけて地方教育者としての役割を果していることにもう少し注目してもいいように思う。

この点については、すでに桜沢一昭氏の業績があるが(『草の根の維新』、埼玉新聞社、一九八二年八月一日)、その中で、中藤村の神官で「指田日記」の筆者の指田藤詮が斎藤寛卿に就いて学んでいたことを紹介し、斎藤が死の直前まで「村に在つて篤実な医師として、あるいは江戸仕込みの知識人として、近隣の村びとや子弟たちから衆望を一身にあつめ」ていたのではないかと記しているが、経歴一覧にみられるように、その斎藤とその子・通亭に、同じく中藤村の内野容斎が文政十年(一八二七)から七年間も就いているし、箱根ケ崎の小山要蔵が天保一五年(一八四四)から嘉永四年(一八五一)まで八年余り、砂川村の井瀧文恭が天保一二年(一八四一)から弘化二年(一八四

五）まで五年ほどというように、「近郷に聞えた漢方医」（桜沢、前掲書）の言葉通り、多くの人材を育てていた。桜沢氏によれば幕末草莽の国学者、権田直助も、わが国古伝の医方の集大成である『大同類聚方』百巻を、この斎藤寛卿から貸してもらって分析し、独自の皇国医道を創始したという。

内野や小山、井瀧らが、斎藤からどの程度、影響をうけたかはわからないが、三多摩の医学史を考察する場合には、漢医学の系譜もおさえておかなければならないだろう。

この人達以外にも、引田村の海老沢俊斎（峯章の父）、伊奈村で医業のかたわら、門弟二〇〇〇人もの私塾を開いていた石川友益、五日市村の和田龍伯、田中玄龍、三村弘道の三人、さらにこの資料を保存していた二宮村（現秋川市）静原家の静原牧太などにも注目しておく必要がある。いずれにしても、医学だけにとどまらず、地域の社会教育や地域文化の面からも、これらの医者がどんな役割を果してきたかをおさえることが今後の課題である。

資料　医生履歴書上

（表紙）「医生履歴書上　明治八年十月　第拾弐大区」

履　歴

第拾弐大区壱小区

武蔵国多摩郡中藤村

指田鴻斎　本月三十六年四ヶ月

一文久三年癸亥三月ヨリ慶応二年丙寅十月迄、東京駿河台淡路坂木村周庵ニ従ヒ、都合三ヶ年一ヶ月間漢医内治学研究、慶応三年丁卯三月ヨリ明治元年戊辰十月迄、東京牛天神下伊東南洋ニ従ヒ、都合一ヶ年十月間西洋内科眼科学研究

一明治二己巳三月ヨリ武蔵国多摩郡中藤村ニ於テ開業

右之通相違無御座ニ付此段奉申上候也

明治八年第九月

右　指田鴻斎

神奈川県令中島信行殿

第拾弐大区

武蔵国多摩郡中藤村

第四拾九番地

内野容斎　本月六十三年九ヶ月

文政十戊辰（マヽ）年二月中ヨリ七ヶ年之間、同村斎藤寛卿江従ヒ漢医術ヲ受、当亦明治元戊辰（マヽ）年三月中、東京下谷益城良斎ニ従ヒ西洋内科学研究及種痘術ヲ受爾後開業

右之通相違無御座候ニ付此段奉申上候也

明治八年第九月

右　内野容斎

神奈川県令中嶋信行殿

履　歴　書

第拾二大区二小区

武蔵国多摩郡箱根ヶ崎村第百十番地

医生　小山要蔵

五十一年三ヶ月

天保十五辰年ヨリ嘉永四卯年迄、同国同郡中藤村斎藤通亭ニ随身医術研究仕、嘉永五子年六月於同村開業仕候

明治八年九月日　　右　小山要蔵㊞

神奈川県令中嶋信行殿

履　歴　書

第拾弐大区二小区

武蔵国多摩郡石畑村第八拾番宅地

医生　大沢長貞

明治八年九月五拾三年八月

天保十一庚年二月ヨリ嘉永五子年迄、東京旧若山藩岡田昌陸ニ随医術内科研究仕、同六年一月於石畑村開業致候

明治八年九月　　右　大沢長貞㊞

神奈川県令中嶋信行殿

履　歴　書

第拾弐大区弐小区武州多摩郡岸村

医生　池谷玄雄

本年四十五歳十一ヶ月

私儀

一天保十四年癸卯五月東京府日本橋旧稲荷新道葛野良沖医師江天保十六年（ママ）己巳（ママ）三月迄研究、後浅草茅町弐丁目旧松平伊賀守藩浅井宗寿医師江嘉永元申五月迄研究、後芝宇田川丁医伊藤治碩江嘉永三戌年八月迄研究、後浅草出宿小山元沖医師江嘉永丑年二月迄研究、同年三月三日下谷天神下増城良益同号寅二月迄都合十二ヶ年之間痼医学研究、嘉永七年寅三月岸村江開業ス

右之通リ相違無御座候間此段奉申上候以上

明治八年第九月日　　右　池谷玄雄㊞

神奈川県令中嶋信行殿

履　歴

神奈川県第拾弐大区三小区

武蔵国多摩郡砂川村第弐拾五番屋鋪

平民　医　井瀧文恭

本月五拾二歳七ヶ月

一天保十二辛丑年三月ヨリ弘化三丙午年九月迄、当国当郡中藤村斎藤通亭ニ従ヒ、都合五ヶ年七ヶ月間漢医内治学研究仕候

一弘化三丙午年十月ヨリ同国同郡同村ニ於テ開業仕候

右之通相違無御座此段奉申上候、以上

明治八年第十月一日　　右　井瀧文恭㊞
神奈川県令中島信行殿

履　歴

神奈川県第拾弐大区三小区
武蔵国多摩郡砂川村第九拾二番屋輔
平民　医　清水清兵衛
本月三十三歳二ヶ月

一右者東京府四ツ谷荒本横丁山本玄通ニ従ヒ、万延元庚申年ゟ元治元甲子年迄合テ七ヶ年ノ間西洋医学研究シ、慶応元乙丑年一月ヨリ当小区第九十二番屋鋪ニ開業シ、諸先生経験説ニ注意シ更ニ不正不筋ノ薬品等相違不申候

右之通相違無之此段奉申上候、以上

明治八年第十月一日　　右　清水清兵衛㊞
神奈川県令中島信行殿

第拾弐大区四小区
武蔵国多摩郡柴崎村
立川斎宮
本月四十八年
私義

天保十四年正月ヨリ同国同郡上布田宿白鳥昌純随従、嘉永元申年七月迄五ヶ年七ヶ月間内治学研究仕候

安政三卯年八月ヨリ同国同郡柴崎村ニおゐて開業罷在候

右之通リ相違無御座候、以上

明治八年第十月十一日　　右　立川斎宮㊞
神奈川県令中嶋信行殿

神奈川県下平民
旧通称久兵衛
当亥九月六十二年六月
秋山昌順

一天保四年癸巳二月ヨリ同八年丁酉十二月迄、東京池田瑞英ニ従、都合四ヶ年十一月間漢医内治学研究

一天保九年戊戌二月ヨリ武州多摩郡拝島村ニ於開業

右之通相違無御座此段奉申上候也

明治八年九月　　秋山昌順㊞

神奈川県管下第拾弐大区六小区多磨村
第七拾番地
石川一作
当亥年九月
二拾四年八ヶ月

一文久三癸亥年二月ゟ明治三庚午年八月迄、相模国高座郡相原村吉川元順ニ従ヒ、都合七ヶ年七ヶ月之間漢医外科学痼疾医学研究、明治三庚午年八月於而旧熊川村開業

右之通リ相違無御座候間此段奉申上候也

明治八年第九月　　石川一作㊞
神奈川県令中島信行殿

神奈川県管下
第拾弐大区六小区多摩村
第四百拾弐番地
横田甫助
当亥九月
四拾八年九ヶ月
一天保拾四年癸卯五月ゟ弘化四年丁未十二月迄、東京元典
薬頭半井出雲ニ従ヒ、都合四ヶ年十一月之間漢方痼疾医
学研究、弘化四丁未年十二月於多摩村開業
右之通相違無御座候此段奉申上候也
明治八年第九月　横田甫助㊞
神奈川県令中島信行殿

神奈川県管下
第拾弐大区六小区多摩村
第四百廿弐番地
横田幾三郎
当亥三拾七年六ヶ月
一明治二年己巳一月ゟ同壬申年三月迄、東京寄留旧幕臣浜
松貫属士族村山伯元ニ従ヒ、都合三ヶ年三ヶ月之間漢医
本道外科研究、明治五年壬申三月旧於川崎村開業
右之通無相違御座候此段奉申上候也
明治八年第九月　横田幾三郎㊞
神奈川県令中島信行殿

研究履歴書
神奈川県管下第十二大区七小区
武蔵国多摩郡菅生村第五十六番地
農医師　坂本兵助
当四十二歳九ヶ月
一文久元年十一月、足柄県相州愛甲郡厚木村古疾医流新宮
玄忠之方ニ門入仕、廿九歳之砌ゟ三十二歳迄四ヶ年之間
従学仕候
其後三十三歳ゟ神奈川県管下相州栗原村ニおいて開業仕
候処、病気ニ付第十二大区十二小区大久野実家野口徳左
衛門方へ立戻リ、其後長病平癒仕候ニ付、菅生村坂本症
兵衛方養子ニ入夫相成、農間医術業罷在之候
前書之通相違無之御座候
明治八年九月日　右　坂本兵助㊞
神奈川県令中嶋信行殿

履歴書
第十二大区八小区
武州多摩郡二宮村第五十三番地
静原牧太　文友
通称牧太　本月五十三年四ヶ月
天保七年八月ヨリ同九年三月迄、同郡平沢邑木村貞碩江
入門医書素読、同年四月ヨリ、江都湯嶋大根畠ヶ中村永

琢入塾、弘化元年二月迄漢医内治普通学研究、同年三月ヨリ江都浜町竈川岸住旧幕府侍医小川龍仙院文菴江入閃リ、薬剤並代診治療ヲ主施シ、嘉永二年十月帰郷、同月ヨリ右二宮村ニ於テ開業、爾今引続施治罷在候、

明治八年十月　　右　静原牧太㊞

神奈川県令中島信行殿

履　歴

神奈川県管下第拾弐大区八小区
武蔵国多摩郡小川村第三拾九番地
農神田祐之助方同居
神奈川県貫属士族
平野徳頭
明治八年九月三十八年六ケ月

嘉永三戌年八月旧江戸表弐番町漢医法眼、故高島祐庵ニ随ヒ安政六未年迄、都合十ケ年ノ間研究、同年三月、武蔵国多摩郡小川村ニ而医術開業、示後明治三午年十二月駿河国阿部郡安西町四丁目江移転施業、同七戌年六月神奈川県管下第拾弐大区小川村第三拾九番地、神田祐之助方同居、成業仕候

右之通相違無御座候、以上

明治八年第九月　　右医師　平野徳頭㊞

神奈川県令中島信行殿

履　歴

神奈川県平民
第拾弐大区九小区武州多摩郡
引田村第百三番地居住
医　海老沢俊斉
本年本月五十九年二月

一高拾四石五斗

一先祖休哲者東桐吉益ニ随身仕、古方術学法者漢ノ長沙ノ道ヲ本トシ、医業ヲ子孫ニ遺伝致シ二世休哲者父之道ヲ学ヒ、私者伝業仕当時三世ニ至リ候、其後天保五年ヨリ磯野耕道門人甲州一町田中□(虫)産、角田泰順ニ随身仕内外共ニ治術ヲ伝授致シ、法者仲景遺書ニ因リ修行仕、弘化三年巳ノ三月迄ノ都合十三年之間、研究罷在、同年同月ゟ当村ニ於テ開業仕候

一医学　傷寒論　方極　類集方　薬徴

右之通無相違御座候、以上

明治八年第十月　　右　海老沢俊斉㊞

履　歴　書

神奈川県管下第拾弐大区十小区
武州多摩郡伊奈村第六拾六番地

医師　坂本周英

天保十三年壬寅三月ゟ嘉永四辛亥二月迄、元江戸茅場町元膳所藩葛野良冲ニ従ヒ、九ケ年間漢医内治学研究、嘉永四亥三月ゟ右伊奈村ニ於て開業

右之通相違無御座此段申上候、以上

明治八年亥第十月日　坂本周英

履歴書

神奈川県管第拾弐大区拾小区

武蔵国多摩郡伊奈村

医生　石川友益

一文政三庚辰年三月ヨリ同六癸未年五月迄、東京四谷忍原横町高橋芸亭ニ従ヒ漢医内治学研究

一天保六乙未年八月ヨリ、武蔵国多摩郡伊奈村ニ於テ開業

右之通相違無御座候此段奉申上候也

明治八年第九月　右村　石川友益㊞

履歴書

第拾弐大区拾壱小区

武蔵国多摩郡平井村第七拾九番地

医師　荒井静斉　亥七十年八ケ月

私義

上野国山田郡相生新町ニおゐて、荒井元甫ニ入門仕、文政七甲申年ゟ天保四癸巳年迄、拾ケ年之間漢道之諸籍学行仕、同五甲午年より当亥八月迄四十五年之間、治療仕候間此段奉申上候、以上

明治八年第九月　右　荒井静斉

神奈川県令中嶋信行殿

履歴書

第拾弐大区拾弐小区武州多摩郡大久野村

宮岡祐俊　当四拾壱歳拾ケ月

一弘化二巳年三月ゟ嘉永五壬子年三月迄、都合七ケ年二ケ月元江戸芝二葉町住、旧館山藩医池田良徹ニ随ヒ、漢法内治学研究

一嘉永五壬子年四月武蔵国多摩郡於大久野村開業

明治第八年九月　右　宮岡祐斉㊞

履歴

神奈川県管下第拾弐大区拾三小区

武蔵国多摩郡五日市村第五拾六番

屋敷住居寄留

上野国邑楽郡舘林在羽附村半田与左衛門弟

和田龍伯

文政九戌年ヨリ東京下谷三枚橋小川龍仙院文庵方へ入塾
古方医薬相学、天保七申年退塾後、安政四巳年右村ニ而
開業仕候
明治八年第九月　右　和田龍伯㊞
神奈川県令中島信行殿

神奈川県下第拾二大区拾三小区
武州多摩郡五日市村六拾八番地借
同県同郡平井村ゟ五日市内山安兵衛寄留
医業　田中玄龍
本月五十七歳十一月

一先々代ヨリ医業罷在リ候所、私儀去ル天保五歳より十ケ
年間東京本財(村)木町六町目、漢医土屋良益方江入塾、
弘化元年退塾後、右村ニテ開業罷在リ候
八歳九月　右　田中玄籠㊞
神奈川県令中嶋信行殿

履　歴

神奈川県管第拾弐大区拾三小区
武蔵国多摩郡小和田村小峯伝兵衛同居
千葉県管下第七大区六小区上総国
長柄郡福島村橘昌斉亡二男　橘　大造
慶応二丙寅年四月より、武州入間郡川越同心町安部代造
方ニ入塾、明治五年まて古方医薬相学、退塾後、明治六
年右村ニ而開業いたし候、以上
明治八年九月　右　橘　大造㊞
神奈川県令中嶋信行殿

履　歴

神奈川県管下第拾弐大区拾三小区
武蔵国多摩郡乙津村第九拾三番屋敷居住
医師　栗原周造
本月六十弐歳壱ケ月

一文政拾壱戊子年正月ヨリ五ケ年之間、同国同郡五日市村
寄留漢医鎌田周奄方江入塾罷在候処、天保三辰年十二月
中開業配伍罷在候、以上
明治八年第九月　右　栗原周造㊞
神奈川県令中嶋信行殿

神奈川県下第拾弐大区拾三小区
武蔵国多摩郡戸倉村第五拾五番地
医業　内倉淳成
本月五拾四歳六ケ月

一天保六乙未年ヨリ九ケ年之間、東京四ツ谷塩町壱丁目漢
医山田喜徳方江入塾罷在候処、天保拾四年帰国、開業配
伍罷在候
八年九月　右　内倉淳成㊞

神奈川県令中嶋信行殿

履　暦（ママ）

神奈川県管下第十二大区拾三小区
武蔵国多摩郡五日市村第七拾四番地清水半治郎店寄留
元籍甲斐国山梨県管下　医師　三村弘道
本月四十五歳十ケ月
右一名儀弘化三丙午年ヨリ七ケ年ノ間、前山梨県ニ寄留

罷在候、蘭医緒方弘洋方へ入塾仕、翻訳書研究之上退塾、
右元籍ニ開業致居候、然所明治三丙午年当村ニ寄留営業
仕居候

八年九月　右　三村弘道印

神奈川県令中島信行殿

（秋川市二宮・静原輝雄家文書）

明治前期福生地域周辺の医者経歴一覧

	氏名	年齢	村名	開業年	就学私塾の師の氏名（地名・専攻学）
1	指田鴻斎	36	中藤村	明治 2	木村周庵（東京・漢医内治学），伊東南洋（東京・西洋内科眼科）（都合5年間）
2	内野容斎	63	中藤村		斉藤寛卿（中藤村・漢医学，7年間），益城良斎（東京・西洋内科・種痘術）
3	小山要蔵	51	箱根ケ崎	嘉永 5	斉藤通亭（中藤村・医術研究，7年間）
4	大沢良貞	53	石畑村	嘉永 5	岡田昌陸（東京・医術内科，12年間）
5	池谷玄雄	45	岸村	嘉永 7	葛野良沖（東京），浅井宗寿（東京），伊藤治碩（東京），小山元沖（東京），増城良益（東京）（都合12年痼医学）
6	井瀧文恭	52	砂川村	弘化 3	斉藤通亭（中藤村・漢医治学，5年間）
7	清水清兵衛	33	砂川村	慶応 元	山本玄通（東京・西洋医学，7年間）
8	立川斎宮	48	柴崎村	安政 3	白鳥昌純（上布田宿・内治学，5年間）
9	秋山昌順	62	拝島村	天保 9	池田瑞英（東京・漢医内治学，4年間）
10	石川一作	24	熊川村	明治 3	吉川元順（高座郡相原村・漢医外科学，痼疾医学，7年間）
11	横田甫助	48	福生村	弘化 4	半井出雲（東京・漢方痼疾医学，4年間）
12	横田幾三郎	37	三崎村	明治 5	村山伯元（東京・漢医本道外科，3年間）
13	坂本兵助	42	牛生村	明治期	新宮玄忠（愛甲郡厚木村・古疾医流，4年間）
14	静原牧太	53	二宮村	嘉永 2	木村貞碩（平沢村・医書素読），中村永琢（東京・漢医内治），小川文菴（東京・薬剤，

					代診治療）（都合13年間）
15	平野徳頭	38	小川村	明治 7	高島祐庵（東京・漢医，10年間），安政6年に一度小川村で開業，明治3年に静岡県阿部郡安西町で開業，同7年に再度小川村で開業
16	海老沢俊斎	59	引田村	弘化 3	先祖の休哲（古方術），角田泰順（山梨・内外治術，13年間）
17	坂本周英		伊奈村	嘉永 4	葛野良沖（東京・洋医内治学，9年間）
18	石川友益		伊奈村	天保 6	高橋芸亭（東京・漢医内治学，3年間）
19	荒井静斉	70	平井村		荒井玄甫（群馬県山田郡相生新町・漢医，10年間）
20	宮岡祐俊	41	大久野村	嘉永 5	池田良徹（東京・漢法内治学，7年間）
21	和田龍伯		五日市村	安政 4	小川文菴（東京・古方医薬，10年間）
22	田中玄龍	57	五日市村	弘化 元	土屋良益（東京・漢医，10年間）
23	橘　大造		小和田村	明治 6	安部代造（埼玉県入間郡川越・古方医薬，6年間）
24	栗原周造	62	乙津村	天保 3	鎌田周奄（五日市村寄留・漢医，5年間）
25	内倉淳成	54	戸倉村	天保 14	山田善徳（東京・漢医，9年間）
26	三村弘道	45	五日市村	明治 3	緒方弘洋（山梨県寄留・翻訳書研究，7年間）

（注）明治8年10月にまとめられた第12大区の「医生履歴書上」より作成。